
悪虫 wa-mushi

龍之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪虫 wa - mushi

【Nコード】

N0126Q

【作者名】

龍之介

【あらすじ】

不思議 京介は大晦日の夜、チョコルとルコラと名乗る天使と悪魔から、能力をさすげられ、最強の男となった。しばらくは、いい気分で、やりたい放題やっていた京介だが、しだいにチョコル達は京介に奇妙な宿題をだすようになる……。

悪虫の企みと、人の心の戦いの、幕は上がっていた。

ホームく未来方面行き>

「ぐはあつ、まさかこの八高、最強の剣崎さまが、こんなチビにやられるとは!」

剣崎とかいうでくの坊は、つまらない台詞を残して、倒れやがった。口から血を吐いて、地面に顔からぶっ倒れる。俺はその不細工な顔に、足をのせて言っちゃった。

「だから覚えろ、おっさん。俺の名前は、不思議 京介だっつってんだろ」

剣崎のポケットから、小さな虫が、こそこそとはいでてきた。俺から隠れられるとおもっているらしい。

まあ、無理だ。

なんてたつて俺は、最強の中学生。まあ、今日からだけど。

まだ毛の生えていない鳥の子みたいな悪虫を、指でつまみあげ俺は口に放りこむ。これで三匹目。奥歯でかみつぶす寸前まで、悪虫は、助けてくれ、なんならこの街一の男にしてやるから、と命ごいしやがった。

覚えておくといい。俺にそんな文句はききやしない。

一月一日の午前0時から、俺はこの国、最高最強の男になったのだ。チヨコルって名前のうっとうしい悪魔と、ルコラって名前の穏やかな天使のおかげでな。

さて、次の悪虫は、どいつだ？

「おはよう、京介くん？ きょうのご機嫌はいかがかしら？」

飲み物を買いにコンビニへ向かっているだけなのだれど、どうにもまだ違和感がある。

「とっても気分がいいね。だって、こんなにもきれいな天使があいさつしてくれているんだから」

「お上手ね」

それでもルコラは、気を良くしたのか、大きな羽をなびかせ、俺の肩を軽く叩いた。

その拍子に、半透明の羽が何枚か、落ちる。その羽は、まるで意思を持って冬を踊っているようだ。

誰も足を踏みいれることのない山の頂上に降る雪みたいで、美しい、と俺は思う。

まだ、天使やら悪魔やらと会話しながら歩くのには、慣れていない。

まあ、この二人と話しているからと言って、俺が変質者に思われることはないのだが。

光があるから、闇がある。

いいことがあれば、わるいことも、やはりある。

「なあ、ルコラ。やっぱり、今日は気分がよくないみたいだ」

「あら、どうして？」

「しらん」

ルコラは俺の指差した方向を見た。

コンビニの駐車場に、金髪の男たちがたむろしている。見せかけだけの、群れなきやなにもできない、虫けらに支配されたウジ虫。

「京介くん」

「わかってる、俺がやるんだ。俺しかいないんだ」

どうにもおかしい。

ルコラたちに、力を授けられてから、自分で自分をコントロールできないほどに腹がたって仕方がないことがある。

もちろん。今までだって腹はたつことなんて、数え切れないほどあった。

でも、この怒りはちがう。英雄を迎える群衆の歓声を抑えること

はできないように、俺が俺を超えようとしている。

この力を、怒りを。誰が沈められるだろう。

我慢できない、俺は。

弱く汚れた屑が阿呆な面して威張り散らす世の中が間違っていることに、俺しか気づいていないのか。

俺は、顔中がピアスだらけの男たちに向かっていき、思いっきり、足を踏んでやった。

男たちは、一斉に立ち上がり、頭の悪そうな顔を真っ赤にして、俺の胸ぐらをつかんだ。

「なに、へらへらしてやがんだ？ ガキ」

俺はまだ動かない。まだ、動いてやりもしない。

次の瞬間、男たちは頭を抱えて、俺の足もとにはいつくばった。立ち上がる。汚い言葉を発する。そして壊れる。

その間、二秒。

二秒。

現世から永遠の地獄への旅行時間だ。

コンビニで、買い物を済まして、空を見上げると、雪が降ってきた。

「ルコラ。やっぱり今日は気分がいいよ」

「あら、京介くん、なんだか変だわ。いったいどっち？」

「だってさっきの奴らみたいに、俺以上についていない奴がいるからね。そいつらの共通点はなにかわかる？ ルコラ」

「……わかったわ、それは」

俺はルコラを、手で制して言った。

「出会ってしまったことさ、この俺にね」

俺は口笛を吹きながら、降りつもるであろう雪を、眺めながら歩いた。

ルコラはルコラで、指先で雪を操って、美術作品のような模様を作って遊ぶ。

「ねえ、京介くん。あなたって」

「なに？」

「格好つけてるけれど、ブラックコーヒーは飲めないのね」

痛いところを突かれてしまい、俺は頬があつくなるのを感じた。

紙パックのうんと甘いカフェオレを飲む。

ようやく覚めていた体が、また火照っていた。

チヨコルとルコラは色々知っているらしい。

俺の名前から生年月日、趣味嗜好。好きな女子の名前から、いつ死ぬまでかだ。

まあ、死ぬ日については規則があるとかいうことで、教えてくれはしなかったけれど。

今の俺が死ぬ日が来るのか？

倒せる気がする。

死という誰も敵わなかった、相手さえ。

敵わない奴はいない。だが敵わないものはある。それは、この力だ。

俺が死ぬ時。それは敵無しに退屈した俺自身が、この敵無しの力に勝負を挑む時だろう。

「なにをぼつつとしているんですか、京介？ さっきから話しかけているんですよ」

チヨコルだ。

「ぼつつとしているんじゃない。無視していただけだ」

「なーんだ。……ってひどいですねえ！」

「ああ」

どうにもチヨコルが苦手だ。というよりも生理的に合わないという方がしっくりくる。

初めて俺の目の前に現れた天使と悪魔を見た瞬間、どちらがどちらかが分かった。

俺は知っている。

言葉づかいや、表情、仕草が丁寧な奴ほど、心の中では、何を考えているかわからない。

「京介のその可愛くない性格は、やっぱり家庭環境なんですかね、おっと失礼」

俺の顔色が変わったのを敏感に感じたチヨコルが、ベルを鳴らしてルコラを呼んで代わった。

「なあ、ルコラ」

「なに？ 京介くん。見て、綺麗でしょう？」

ルコラは俺の部屋の中に小さな雪雲を作って雪を降らす。ふっ、とルコラが息を吹きかけると、雪粒は音楽を奏でながら、吹雪いた。

「人生、楽しいか？ チヨコルの尻拭いばかりだろう？ チヨコル

はさぼってばかりで、地上に降りてくるのはルコラばかりじゃないか」

「そう」

ルコラは、ふふ、とほほ笑む。

「楽しいわ。京介さんと会える時間が増えるもの」

「ああ、そう」

「ええ」

どうやら。ルコラは俺のことが嫌いじゃないらしい。

このことを、あの明日香の奴が知ったりしたら。

想像すると頭が痛くなった。

俺がこめかみを押さえていると、ルコラが心配そうに顔を覗き込む。近くで見ると、ルコラの顔は整っていてどきどきする。変な気を起したわけじゃなく、その肌に触れてみたい。

「目がすこしにごってるわ。虫を食べたからかもしれない。見て、これが何か分かる？」

いくら相手が、年上っぽい天使とは言え、この質問は馬鹿にして

いる以外のなにものでもない。

「胸の谷間だろ？ それも特別にぺったんこの」

ルコラはまな板みたいな胸を寄せたまま、頬をふくらませた。

「ものの言い方ってもんがあるんじゃない？ 健全な青少年の君のためにサービスしてあげたのに！」

頼んだ覚えはない。

丁寧な言葉で気ままな、悪魔チョコル。
大人びた言葉で大人しい、天使ルコラ。

早くも俺はこの二人、天使と悪魔は二人と数えていいのかは分からないが、との時間に、満足感をかんじはじめていた。

まだ、その全体像を理解できない。

この力は、果たして何なのか。

ただ、こうしてベンチに座っているだけでも、百獣の王、獅子の
退屈が分かる。

聞こえるのは俺だけか？

怯える鳥の、音もない羽音が。

「ねえ、京介くん？ そうだ、ひとつなぞなぞでもしましょう。この世界を作ったのはだれだと思う？」

「さあね。壊せるのは俺だけけれど」

ルコラは、子供をあやすように笑った。

「考えておいてね、宿題よ。さあ、行きましょう」

そして俺達は歩き出した。

俺はまだ知らない。ルコラとチヨコルの微笑みと真顔の裏にある真実を。

俺はまだ知らない。俺自身の過去から伸びてきた現在と、伸びていく未来を。

駅で列車を待っている時だった。

ルコラが、ふいにこんなことを言った。

「ねえ、京介くん。私は天使。あなたは人間。そうよね」

「もちろん」

俺はそう答えた。

なんの疑いもない事実だ。

ルコラには羽が生えているし、宙に浮いている。

残念ながら、俺に肩甲骨はあるが、羽はない。垂直とびならできないこともないが、あんな時間、足を地面から離すのは無理だ。

列車はなかなかやってこない。

かと言って急かされることもなかった。

特にこれと言って用もなく、市内へ出ようとしていただけだからだ。

腕試しのために、人の集まる場所へ行きかけたということもある。

あの陰鬱な家にいたくなかったということもある。

向こうのホームに電車が入ってきた。

その時ルコラが言った。

「あの人、名前は分かる？」

電車がゆっくりと動き始め、ホームにいる人々が次第に見え始めた。

「京」

京？ 俺は確かに、京、という名前を口に出した。

何かがおかしかった。

俺は確かにその名前を口にしながら、目ではルコラの言う、あの人、とは誰なのかとたくさんの人を目で追っていたのだ。

肉体と精神の動きが一致していない。

向こうのホームでは、人が改札に向かって流れていく。

その中で一人だけ、こちらに背を向け立ち止まっている人がいた。

黒い服を着ている。

それも安い娼婦が着るような黒ではなくて、宇宙のような黒い服を着ている。

ベンチに座っていた俺は立ち上がり、ひざまずいた。

「ルコラ様、ついに」

ルコラ様？　俺は自分の言ったことに、動揺していた。

ルコラ様。こいつはルコラだ。

俺の体は動き続けている。

ついに俺はひざまずき、両の手を合わせ、恐れをなして祈るような姿勢になった。

雪が降っている。

遠ざかっていく列車の音に、つられるように静寂が響きはじめた。

雪が強くなった。

俺の目は、黒い服を着た男を捉えている。

そして、俺の意識は途絶えた。

「その神力を、虫に喰われた人間以外に使つと、何が起こるかは分からない。まあ、心配するほどのことでもないけれど」

「神力つていうのか、これは」

正月気分も抜けきらないのに、退屈な学校は始まってしまった。

あのホームで眠ってしまった日、俺は終電が行っても、夢の中にいたらしい。

病院のベッドで目覚めた時の、あの景色がよみがえり、俺は思わず吐き気をもよおす。

心配そうに俺を囲む、親。

あんな奴ら、俺が殺してやった方が幸せなのだろう。

「なあ、ルコラ。何が起こるか分からないってことは、いいことが起こるかもしれないってこと?」

「ええ。でも」

「分かってる。悪いことが起きるかもしれない」

もしかしたら。

何も起こらないかもしれない。

でも、注意をしてくるといふことは、その可能性は低いといふことだ。

「京介くん、君に対して好意丸出しの、あの女生徒はどなた？」

ショートカットの髪を激しく揺らしながら明日香が、走ってきた。

「ー心配かけたな。」

なんて言うことは絶対がない。

「京介。また遅刻？ほんとにしつかりしなさいよね？もうすぐ三年生だつていつのに」

「ああ、遅刻だ。その遅刻しそうな俺と一緒に登校する、お前も遅刻だろう」

「残念でした」

エンジン音がしたと思ったら、急ブレーキをかけて明日香の脇に大きなバイクが止まった。

ヘルメットもかぶらず、明日香は俺に舌を出してあつという間に交差点のあなたに消えていった。

「伊 明日香。京介くんの彼女、ではなくて腐れ縁、ということにしておくかな」

ルコラが、俺の耳元でささやく。

「面白くないね。だって明日香ちゃん、大学生のボーイフレンドとバイクでご登校だもん」

「興味がない、俺は虫とルコラのことと頭がいつぱいだ」

「だといいんだけれどね」

物事にはルールがある。

嬉しいことも悲しいことも、やってくるのは理。

もちろん、それには積み重なった必然がある。

終わりは突然にはやってこない。

必ず始まりがある。

毎日を、惰性で生きている人間はそれに気がつかない。

担任の越智が教室に入ってきてても、クラスの誰も御喋りをやめようとしなない。紙飛行機が、越智のハゲ散らかした頭に刺さった。

何もいわず、越智は出席を取り、適当な返事が三十二人分終わると、何の興味もなさそうに教室を出て行った。

見慣れた朝の風景。

俺も明日香も越智が嫌いだ。

俺は、ああいうやる気のない教師が嫌いだし、明日香は子供になめられる大人を誰よりもなめている。

黒板のまん前の席で、時計を眺めながら、俺はルコラがノートにペンを走らせる音を聞いていた。

「なあ、俺から宿題を出していいか？　この前はルコラが出しただろっ」

「もちろんよ、たのしみだわ」

「学級崩壊したクラス。悪いのは力の足りない教師？　それとも頭の足りない生徒？　どっちだと思うっ」

ルコラはいつつも左手に持っているノートに、すらすらと綺麗な字で俺の質問を書いた。

「今日の午後、会議があるから、みんなに聞いてみることにする」

会議？　たくさんのルコラとチョコルみたいなのが、どんなこと

を会議するのか。

「カンニングはなしだ、といたいけれど、目をつぶることにしようか」

「やさしいのね」

チャイムが鳴って、原が教室に入ってきた途端、教室は統率された軍隊のように静まり返った。

俺も空気に従って、姿勢を正して、教科書を開く。

「こつも態度を変えるか？ っと思うだろ」

「簡単じゃない質問ね。これも会議にかけておきましょう。それよりも」

そつだ。

「越智と虫について、かな？」

「そつ、これは宿題じゃなくて、緊急提出の課題よ」

大人が子供に征服される。

子供が大人を裁く。

それはルールに違反しているように見える。

だが、俺には許される。

なぜか？

理由なんて明らかすぎて、説明するまでもない。

つかの間の休息。

昼休みに入り、俺は一人で屋上にのぼり、形をゆっくり変えながら空を流れていく雲を、目で追っていた。
いつもなら。

俺のいる場所を抜け目なく嗅ぎつけた明日香あたりが、ジュースでも飲みながらやってくるのだが。

「なあ、ルコラ。天国にも、雨は降るのか」

ルコラは、俺が座っている階段の、三段ほど上に腰掛けて、ノートを読んでいる。

「分からないわね。天国にはあまり行かないもの。好きじゃないのよね、あそこ」

意外だ。天使は天国に住んでいて、何か用事がある時に、地上へ降りてくるものだと思っていた。

「ルコラは、俺のところに来る前は、どこに居たんだった？」

「お久しぶりでえす、京介」

反射的に俺は、首をひねり上を見る。チョコルだ。

「いいタイミングだよ、チョコル」

「何か話しの途中でしたか？ まあ、そんなことどうでもいいですよお」

チヨコルは俺の事情なんてお構いなしに、右手で持っているノートを日よけ代わりにして、あっちを見た。

「悪虫、一匹、世界の終わり、どうして、悪虫に喰われた人間は、ああも汚い目をしているんでしょうね、京介」

まったくもってその通りだ。

俺が今まで見た、何人かの奴らは、そろいもそろって、光が消えたような瞳で俺を見た。

心壊するまでの二秒を除いて。

冷たい風が吹いた。

誰かが捨てたパンの袋が、風によって飛んでいき、見慣れた薄毛に乗った。

「うはっ、ナイスポジションですね、あのハゲ！」

チヨコルは笑い声が聞こえないのをいい事に、腹を抱えて俺をたたく。

ひとかけらの生気もなく、越智は頭にひっかかったパンの袋を、のっそりとひっぺがす。

「しょうもない親父、絵に描いたみたいですね」

「しょうもないから喰われるのか、喰われるからしょうもないのか。どっちなんだろうな、チヨコル」

「興味ないです」

俺もだ。

ここにあるのは事実だけ。

あの越智って先公が、喰われているという真実。

越智は俺とチヨコルが、なかば哀れんだ目で観察しているとも知らずに、一人さびしくフェンスに肘掛けている。

「あの親父、飛び降り自殺でもするんじゃないですか？」

毛玉だらけのカーディガンを着た、越智の背中は生命力というものがまったくない。

「そんな気力でもあれば、さっさと教師なんてやめてるだろう」

「そうですねえ。それよりも大丈夫ですかあ？ 先生をやっちゃう訳ですけどお」

つまらない心配だ。

「俺はな、チヨコル。あの先公に慈悲を感じるほど、おちぶれちゃ

いないよ」

「ちょっとでもためらうそぶりでも見せたら、チョコルが京介の命をやっっちゃうとこでしたあ」

チョコルは大きな表情で、首をかつ切るポーズをした。

「それにしても、いやなもんだな」

「何がですか？ 神力を授けられて、しばらくは、全員、有頂天、って感じで楽しそうなんですけどお」

「頂にのぼっても、地面の害虫を相手してやらなきゃいけないことがだよ」

「京介は、すこし変わってますっ」

変わってるんじゃない。変わったんだ。

最も強い者は、最もくだらない弱き者を、本能的に軽蔑してしまっ

品定めを終えたチョコルは、またチョコレートを減らず口に放り込んで、ちよっかいをかけてくる。

適当にあしらうには、あまりにうっとうしいチョコルの動きを視界に入れないようにしながら、俺は手すりに身を乗り出し、グラウンドを見た。

そして越智の未来を弔ってやるように、パンの袋を宙に捨てる。

さっきのチヨコルの言ったことが気にかかった。

「なあ、チヨコル。ってことは、俺以外に神力を手に入れた奴が…」

「ぶう、間違いですう。神力は、手に入れるものじゃなくて、授けられるものでなのですよお」

何の違いがある。

「俺以外にも……」

「覚えておいてくださあい？ チヨコルがチヨコレートを食べてるときは何人たりとも邪魔できないのでえす」

そう言ってチヨコルは、おいしそうにチヨコレートを、箱から出しつづける。

「なあ、チヨコル。おやつにしたいなら、ルコラと変わってくれないか？」

「覚えておいてくださあい？ チヨコルがチヨコレートを食べてるときは何人たりとも邪魔できないのでえす」

ほんとうに憎たらしい野郎だ。

「これじゃ、悪魔というよりただの役立たずじゃないか。痛っ」

「覚えておいてくださあい？ チョコルは立派な立派な、大悪魔なのでえす」

チョコルにつねられた頬を、抑えて俺は、地面に落ちたパンの袋に目をやった。

袋は生徒に、次々と踏まれていった。

目を開ける。

ホームから列車が出て行くところだ。

俺は、泣きわめきながら、走り寄って、手を伸ばす。

何もつかめなかった手を広げたまま、白い二両列車が遠くになっていくのを、見ている。

ふとした拍子に頭に浮かんでくるイメージ。

この映像と音は、妙に生々しくて、鉄がこすれあう甲高い音や、広げた手に当たる雪の冷たさ、頬を伝い落ちる涙の熱さ、そのた諸々が、やけに生々しく感じられる。

「なあ、チヨコル。おやつ時間は終わったのか？」

気にすることはない。

いつかテレビで見た映像か、小さな頃の記憶が誇張されているか。心理学者にでも聞いてみるか？ 馬鹿馬鹿しい。

「チヨコル？」

俺の呼びかけに反応しながらも、チヨコルの様子がどこかおかしい。まどった布から、飛び出た尻尾も丸まっている。

「なんでもないよお、何か用う？ あ、ハニーのお出ましい。チヨコルいないことにして、キスでもすればあ？」

「誰がするか、ハニーじゃない、ハニーじゃ」

きよろきよろとあたりを見回していた明日香が俺を見つけた。目があった途端に、可愛くない仕草で怒りを表す。

これがハニー？

確かに。見てくれだけは悪くはないのだろうが、煮ても焼いても食えない金魚みたいな性格、竹を割ったような男じみた頭の中の構造からして、この俺には不釣り合いだ。

「京介！ 探してたんだけど。校内放送で、越智が呼び出してたよ」

「面倒くさい」

俺は屋上を後にしようとしたが、すれ違い様に明日香が、足をひっかけてきた。不意をつかれ、どうしようもない俺は、明日香の腕をつかみ、そのまま倒れてしまった。

俺の上に、明日香が乗っかる体勢になり、あまりの顔と顔の距離のなさに、沈黙と気まずさが流れる。

「青春、京介。そして大胆」

「黙れ、この役立たずめが」

役立たず、という表現が気に障ったのだろう。

チョコルは頬を膨らまして、その小ささでどうして、そんな量が出てくるんだ、といたくなるほどの量のチョコレートを、脇に抱えたボックスから豪雨のように投げつける。

その間に、何事もなかったように明日香は、スカートについた土ぼこりを払って立ち上がり、俺の太ももを蹴り上げた。

「痛いでしょ！ こけるなら一人でこけてよ！」

「どうい言う草だ。」

「とりあえず、私は伝えたからね」

「わかったよ、行く行く」

俺は階段を下りて、体育館へ続く廊下を、ぶらぶらと歩き出した。その時、視界が真っ暗になり暗闇に電流が走る。

「京介？ 職員室に行くんじゃないの。そっちは体育館よねえ？」

「遠回りしただけだよ、健康のために」

「なるほど、じゃあ、私もダイエットのために歩こうな」

結局、明日香に監視される形で、職員室の前まで歩くはめになり、その間中、くすくすと、チョコルは笑うわで、最悪の昼休みになってしまった。

職員室のドアを開ける時は、心構えが必要だ。

あの独特の空気を吸うと、息苦しくなる。

「これを教室まで運んでいてほしいんだが、不思議。腰が痛くてな」

「わかりました、やっておきます」

越智は今日も肌につやというものがない。

明日香に手伝ってもらおうと思ったが、どこにもいない。いつつ
もだ。必要なときには、傍にいた試しがない。

頼まれた資料にうんざりしながら、階段を上る。

「チョコルにはバレバレですよ」

「俺は、明日香が、好きじゃないといってるだろう」

休み時間を謳歌する同級生の笑い声を聞きながら、頼まれものを
運んでやるのは楽しい訳がない。ましてや、うざりたい、このチョコ
ルの相手をしながらじゃなおさらだ。

「誰も、伊ちゃんのこと言っていないですっ」

墓穴を掘ってしまったか。

「あの、さつき屋上にいたしょうもない親父、腰が痛いって嘘ですよ」

「どづいことだ？」

「さあ？ 自分で運ぶのが面倒くさいだけでしょお」

しょうもないオヤジ、俺とチョコルは声をそろえて舌打ちをした。

まあ、いい。

俺は教卓の上に、資料の山を乗せ、窓の外を見る。まだ高い冬の日は、景色の輪郭を鮮明にして、冷えた地面に降り注ぐ。

今日の夕日が沈むのと一緒に、あのしょうもない越智という人間は、心から壊れる。

珍しく、チヨコルは長居した。

「なあ、ルコラは会議だろう？ お前はいなくていいのか」

「チヨコルのことならお気遣いなくう。後でルコラから、要点だけ聞いておくのでえ」

「そりゃ、ご苦労なこつた」

「でしょお」

まあ、待ち伏せの間の暇つぶしにはなったので、一概には悪い時間だとは言いきれないが。

クラブ活動も終わり、ほぼ全員の生徒が下校した。

俺は、誰もいなくなった教室の一番後ろの机の影に座り込み。越智が来るのを待っていた。

いつ来るのかは分からない。

ただ、チヨコルが教室にいれば、必ず虫をつぶせる、とのたまっていたから、いるだけだ。

その間やりとりのくだらなさつたら、寿命の無駄遣い以外の何者でもない。

「チョコルはあ、オレンジジュースが飲みたいですう」

「天国に行つて買つてこいよ」

「地上のオレンジジュースがいいのでえす。京介、自動販売機があるじゃないですか、あそこに」

たしかに。あるのはある。だが。

「どうして俺が、チョコルの使いつ走りをする必要がある？」

そっくり終わるか、終わらないかのタイミングで、空が光り、さまざまい音と共に、夕暮れのに雲が立ち込めた。

「いいんですかあ？ チョコルを悲しませると、雷が落ちて、地球がストップしちゃうかもしれませんよお？」

子供がいじけたように、目を潤ませてチョコルは、半ば脅迫じみた物言いをした。

「知るか。地球がストップしても、俺はお前の言うことは聞かない」

「チョコルのせいで雷が子供に落ちちゃって死んでもいいんですね？ チョコルが人殺しになつてもいいということですかあ？」

「人殺しどころか、お前は悪魔だろう」

チヨコルの目から、ぼろ、ぼろ、と涙がこぼれた。暗雲たちこめた空から、連続して雷が落ちる。

どこまで本気が分からない。

「ありがとうございます。覚えておいてくださあい？ チヨコルが地上のオレンジジュースを飲んでいる間は、世界は穏やかな天気なので
す」

「ご機嫌な笑顔を浮かべて、チヨコルはペットボトルのオレンジジュースを、ちびちびと飲んでいる。

さつきまでの雷が嘘のように、外は晴れ渡り、虹もかかっている。

「いいことを聞いたよ。これからはずっとジュースを飲んでいてくれると嬉しいんだけどな」

「それは京介？ チヨコルといるのがいやということですか？」

チヨコルが目を細めて、ふてくされかけた。その通りだ。

「いやいや、そのかわいい笑顔をずっと見ていたい、ってことだよ」

チヨコルは、頬を膨らませて、すこし俺から離れて、落ち込んだそぶりじゃがみこみ、床の上の木目を指でなぞる。

「嘘です。チヨコルに嘘は通じません。ルコラと違って、チヨコルは嘘は分かるんですよ」

「嘘をついたわけじゃないよ。ただ冗談を言ったただけだ」

「なーんだ。……って一緒のことですっ」

嘘を付けない、というのは意外と困るものだ。ましてや、チョコ
ルみたいなのが相手なら。

オレンジジュースを飲み終わると、またチョコルはチョコレート
を食べ始めた。

この悪魔は、自称では大悪魔らしいが、嘘を見破ることができ
らしい。ルコラとは違って。

じゃあ、ルコラはいつたい何ができる。ルコラにできてチョコ
ルにできないことはなんだ。

ルコラに聞いてみようと思ったが、俺にも学習能力ぐらいある。

チョコルがチョコレートを食べている間は、何を話しかけても無
駄だ。

誰もいなくなった学校は、すこし不気味だ。

こうしてずっと、電気を消した教室の後ろの席の下に隠れている
と、幽霊から逃げ回っているような錯覚に陥る。

「きたな」

チョコレルの返事はない。どうやらチョコレートを食べ終えて、腹がいっぱいになったのか、居眠りをしている。

廊下の足音が、この教室の前でいったん、止まった。

越智がドアを開けて、教室に入ってきた。

俺は息を静める。が、チョコレルのいびきが気になって仕方ない。

俺がチョコレルを起こそうと四苦八苦している中、越智は教壇に向かい、チョークを手に、綺麗に掃除された黒板に数式を書き始めた。

しばらく俺はその動きを見ていた。というよりも呆気に取られていたというほうが正確かもしれない。

授業では見せたことのない機敏な動きで、三色のチョークを使って、黒板を文字と図形で埋めていく。

黒板が完全に数字と式で埋まると、越智は振り返った。

その越智の瞳の色と、それから始まった授業を俺は忘れはしないだろう。

「柄にもなく明日の授業の予習か」

開いたテキストを片手に、出席簿に目を通す越智は、こうして見るといつもと何ら変わりないようだ。

それはそうかもしれない。

俺が越智を知る前、それもずっと前から、虫に喰われていたかもしれないのだ。

それにしてもあの目だ。

明らかに、気が宿っている。あの目と、その背後に書かれた意味のつかめない黒板の字が、マッチしない。

「最後の授業、という訳か」

「葛藤、ですねえ」

「葛藤？」

赤城、猪田……越智は出席を取り始めた。いつから目が覚めていたのか。

チヨコルは保母が園児にものを教えてやるかのように、俺を指差して身振り手振りをつけて、説明する。

「喰われた人間が、たまに見せる行動ですよ。それをチョコル達は葛藤と呼んでいます。まあ、一種の断末魔でしょうかね」

断末魔。

「それはどつちの断末魔だ？ 壊されゆく人間の、助けを求める泣き声か。それとも壊しゆく悪虫の、快感の笑い声か」

「自分で判断するのも、また一興じゃないですかねえ？ 良心の呵責に耐え切れなかった、とも考えることもできますが」

チョコルは、アンティークな形のカメラを取り出した。レンズの先を俺に向け、シャッターを切る。

「ふざけるな、チョコル。遊びじゃないんだ」

「こっちは遊びですよ？ 京介はすこし甘いところがありますね。この間のコンビニでは問答無用で、心を壊したのに」

甘い？ 俺は甘いのか。

たしかにこの間のコンビニでは、湧いてきた怒りが、俺をせきたてるようだった。だが。

今は、怒りとは少し違う。

マーブル模様の感情が、俺の芯から湧き出てくる。

興奮しながらも、冷静なのだ。

「不思議、不思議京介」

自分の名前を呼ばれて、思わず机から飛び出そうになった。すぐに、越智は、俺の存在に気がついた訳ではなくて、出席を取っているだけだとういうことに気がついたが、チョコルがすかさず撮ったシャッター音を鳴らした。

「さて、ひとつ宿題でえす。葛藤とは、いったいなんでしょう？」

「止せ、こんな時に。そんな状況じゃないだろう」

「チョコルにとっては、どんな時、どんな状況だろうと、お遊びなのです。まあ、おうちに帰ったら復習することですなえ」

その時だ。越智の体が電池が切れたように、フリーズして耳の穴から黒い煙が蒸気のように噴出し始めた。

アニメに良く出てくる、頭を使いすぎてパンクしたような、その現象は、この正常とは言いがたい状況に似つかわしくない。

しばらくして、また越智は動き出した。

「では授業を始める。まずはこの公式は、何を表したものだろうか？」

「はい、悪意のメカニズムでえす」

「そうだな、殺意に特化した悪意ともいえるが」

俺はあわててチョコルを押さえ込んだ。俺が口をふさぐと、チョコ

コルは目で笑って俺の手をべろべろと舐める。

「舐めるな」

「ぶはあ、大丈夫ですよ。たしかにチヨコルの言ったことには反応しましたけど、どうせ、チヨコルが答えたことなんて、跡形もなく消えさつて、結局は何も残りはありませんからあ」

「大丈夫なのか？ それよりも悪意のメカニズムとはどういうことだ？」

「そのままです。人の悪意の発生する仕組みを公式に表したただけのもです」

そういわれて黒板を見てみると、確かに、ところどころ憎しみ、や妬み、といった単語が書いてある。どこか外国の言語で書かれたようにも思えるし、ただランダムに文字を並べただけのようにも思えた。

「最後の最後まで授業をするなんてな。まあ、三流教師にお似合いの終わり方か」

チヨコルは唇から少し舌を出して、テンションのあがった様子でカメラを構えてシャッターを切り続けている。越智は生き生きとして、悪意についての講釈を垂れては、まるで生徒が見えているかのように頷く。

なんだか幸せそうだ。

俺はとくに慎重になることもなく立ち上がり、越智に近づいた。

「なんだ不思議、トイレか。かまわんぞ、行ってこい」

「授業は終わりですよ、越智先生」

黒板の上の時計が一秒を刻んだ。俺と越智の視線が重なる。越智の目が炎を宿したように輝いた。

越智の目の中の炎は、瞳を焼き尽くして閃光となり、誰もいない夕日の差し込む教室を明るくさせた。

心壊した越智は、操り人形の糸が切れたようにひざまづき、俺に頭を下げるように倒れこむ。

黒板の上の時計が、もう一秒、刻んだ。

二秒。

俺は、這い出てきた虫を摘まみあげながら、静かに出席簿を閉じた。

すっかり日は落ち、差し込む月明かりだけが、教室に影をつくっていた。

「さてこの抜け殻をどうしたものか」

月明かりの青色と、その影の黒色の二色で、仄かに染まった教室の中、俺は動かなくなった越智の体を見下ろしていた。

「どうもしないわ。人間には、どうしてこの人間が壊れたかのなんて分かりやしないもの」

「ルコラか」

カメラを軽く叩きながら、ルコラは、俺の手の中にもかかわらず逃げ場所を探そうとする虫を、地面に叩き落した。

「あなたの名前は、なんとおっしゃるのですか？ 私めなら、きつとあなた様を救うことが……ぎゃっ！」

こびへつらつてずいぶんと壮大な台詞を向けた虫を、ルコラは踏み潰した。

「ルコラは意外と勇気がある」

「どうして？ 私だって虫を殺すこともあるわ。もちろん、名もなき小さな生き物を救うこともあるけれど」

教室のスピーカーから、チャイムが聞こえてきた。閉門時刻だ。もう数分も経てば、警備員が巡回してくるだろう。

「行こう、ルコラ」

これ以上、こんなところにいる意味がない。

「チヨコルは撮るだけ撮って、後は私に放り投げるんだから。昔からよ」

「手にとるように伝わってくるよ、チヨコルとルコラの関係が」

カメラについているハンドルのようなものをゆっくりと回しながら、ルコラは演技染みた困り顔を浮かべる。

靴箱を出ると、さっきの出来事が夢のように思えるほど、穏やかな夜だった。

ルコラの靴についた、虫の血がなければ、俺は白昼夢を見ていると、自分でも思ったかもしれない。

「ほんとこのロートルカメラはいやになっちゃう。またご機嫌斜め」

「捨てちゃえばいいじゃないか」

「そつよね。いい提案だわ」

口ではそういいながらも、きっとルコラはそんなことはしないだろう。おそらく、今までもこうしてチヨコルがすぎ放題に使って壊れかけたカメラを、何度となく修理してきたんだ。

現に、おんぼろのカメラを見るルコラの目は、とてもやさしい。

「いけない」

「どうしたの、京介くん。そんな大声をだして」

大事なことを忘れてしまっていた。また学校まで引きかえすのかと思うと、気が一気に重くなった。

「黒板がそのままだ。もし警備員か、明日一番に登校してきた誰かが、あれを見たらまずいんじゃないか？」

「なんだ、そんなことね」

ルコラはなんでもないわ、とでも言うように、極細のドライバーのような道具をカメラに突っ込みながら、答えた。

「あの文字列が、見える人間がいることはまずないわね。見たからといって、ただの落書きとしか思わないから、たいていの場合は」

「まあいい。どうなろうと知ったこっちゃないといえば、知ったこっちゃないからな」

あの文字列と俺と、壊れた教師の体を、結びつけるものは何もない。

どんな名探偵といえど、俺までたどり着くのは、百パーセント不可能だ。

門を出ながら、学校の方向を振り返る。職員室のある校舎だけ、明かりが灯っている。

越智も、毎日こんな時間まで残って仕事をする程、熱心な教師だったならば、今頃は違う人生を送っていたかもしれない。

「宿題でもだしましょうか」

一息ついたのか、ルコラが手のストレッチをしながら、首を回す。

「それとも、私が質問に答える時間にする？」

「出来れば質問に答える時間にしてもらいたいね。宿題は嫌いなんだ」

「分かったわ。宿題ね」

子供がちよっかいをかけてくるように、ルコラは俺の答えを無視した。こういうことをチヨコルがするとうつつとしくて腹立たしいだけだが、ルコラがするとお茶目に思える。

「では宿題。私に聞きたいことを考えておいて。ただしひとつだけよ」

「了解だ。提出期限はいつだい？」

「それが質問ね。わかった、答えましょう」

なんだそれは。ルコラは俺が抗議する隙を与えず、言った。

「あなたが、死ぬ。その瞬間までに」

「こりやまたずいぶん先だ」

聞きたいことなら山ほどあるのはある。

だが、どれも取るに足らない疑問にも思えるのだ。

虫、力、人、そして、人が心から壊れるということ。

壊す、ということ。

それらのどれもが、つい最近始まったことだ。

きっと前兆はあつたはずだが。

俺にしか起こらない事象の起因。

それは実にくだらな物思いだ、と俺は思う。

過去を振り返ることに何の意味がある？

過去はもう戻ってこない。

未来は何が起こるか分からない。

あるのは現在だけだ。

「京介、発見」

俺を呼びとめる声があったと思った次の瞬間には、せっかくのシリ
アスなムードは壊れていた。

こんな時に、こいつと出会う必要もなかりつに。

「なにしてんの京介？ こんな時間まで学校にいるなんて珍しいじゃない。心を入れ替えて受験勉強？」

「そつだよ」

「適当に答えないでよ」

明日香はまた女らしさのかけらもない顔で、俺をにらむ。

人を壊してきた、とは答えることは出来ず、明日香の興味が何か他のことに向かうように、話を振ったがアリバイでも聞いてくるように、俺がこの時間まで学校に残っていた理由を問いただしてくる。

「わかったよ、明日香」

「なに。お菓子でもおごってくれるの」

「なんでだよ。ただ校内デートしてただけ」

俺の冗談は面白くないらしい。

明日香は、言ったことを理解するのに二、三秒要して、ようやく言った。

「なら、いいんですけどね。この前、駅で倒れたんでしよう？ もしかしたらまた倒れたんじゃないかと思ってたの。まあ、デートする元気があるなら心配なんて無駄だったようだけど」

また、おせっかい。

小さなころからだ。

まだ本当に小さかったころ、迷子になった俺を必死で探しだした明日香の顔が、脳裏によぎる。

どうして頼まれもしないのに、こつも世話を焼けるのか。

世の中には、実の子にでさえ、構わない母親というものもいるのに。

「いい母親になるかもな、明日香は」

「は？」

「なんでもない」

結局、話している間に明日香の家の近くにまで来ていた。

家の窓から漏れる明りが、なぜだかやわらかく見える。

俺の家とはまったく違うこの家が、俺は嫌いじゃない。

「じゃあね、送ってくれてありがとう。おかげで一人で夜道を歩かずに済んだ」

「ありがとうが言えるんじゃないか。成長したな」

「誕生日は私が一日先です。京介にそんなこと言われる筋合いはない！」

明日香を見送った後、俺は公園に寄りブランコに、腰かけた。

まだ春遠い空気は、痛いほどに冷えていて、吐く息が白く曇る。

「なあ、ルコラ。それは何の真似だ？」

「なんのことかしら」

「本を読む振りをして、俺と明日香の話を聞いていただく」

「そんなことないわ、私は読書に夢中なの」

嘘だ。

ルコラの持っている本は、上下逆になっていて、背表紙に書いてあるタイトルが逆さまになっている。

「まあ、いい」

俺とルコラはブランコに座り、しばらく眼下に広がる町の灯を眺めていた。

「この町の灯の一つが消えても、町にとっては何の痛みもないの。また別の明りがつくから」

本を閉じて、ルコラが言った。

「何の話だ？」

「さっきのことよ」

「明日香？」

「の前」

越智か。

もはや興味を失っていた。

昔、好きだった戦隊物のポスターを見ても、何も感じないように、今の俺は穏やかな気分に含まれている。

「壊れた人間もいる。だけど、今日、作られる新しい心もある、ていうことかしらね。必要以上に何かを感じることはない」

「よくわからないな」

ルコラは運動神経のよさそうな動きで、ブランコをこぎ始める。

背中の羽が、風を切るたびに、なめらかな旋律が聞こえる。俺は耳をすまして、その奏度を聞く。

「ねえ、葛藤ってあるだろう。あのととき、チヨコルが言ってたんだけど」

「ええ。でも。得意分野じゃないから、しつかりとは答えられないわ。ごめんね」

「なんだ」

俺は、この前のルコラの宿題が気になっていた。

質問はひとつ。

まあ、誇張表現だろうが、一応、聞いてみる。

「なあ、ルコラに初めて最後の尋ねことをしたら、俺は死んでしまっうなんてことはないよな？」

そう、俺が言うと、ルコラは珍しく大声をあげて、笑った。

「それが京介くんの辞世の句？」

「いや、独り言だよ、答えなくていい」

「私も独り言を言おうかしら」

俺も腰を上げ、ブランコをこぎ始める。

久しぶりだったが、案外となめらかにブランコは揺れ始めた。

「君は一人じゃないわ。大丈夫、何が起ころうと、一人じゃない」

「つまらないな、ルコラ。売れない歌詞みたいだ」

俺はブランコから飛び降り、もう一度、町を見る。

ルコラの羽の音が、ささやかに響くなか、今日を振り返ろうとする。

そんな自分を嫌悪する自分に気がつく。

俺の中の俺。俺の中の俺の中の俺。

それぞれが別の気持ちで、二つで一つとして、胸の中にある。

俺は一人じゃない？

誰かに頼るくらいなら、俺は一人で滅びたいのだ。

とんでもなく憂鬱だ。

洒落たネームプレートのかかったドアを開け、黙って靴を脱ぐと沈黙が肺に入ってくる。

廊下を進むと半開きのリビングの扉から、つけっぱなしのテレビの音と光が漏れて、暗い廊下を光らせる。

また夕方からそうしているのだろう、テーブルにつっぱして肩を上下させるその傍らには、洋酒のボトルがある。

母親？　これが母親なら。俺はカツコウの子供として生まれてきたかった。

このごろの、もういつからか分からないが、見慣れた我が家の風景だ。

建売の何の変哲もない一軒家。二人の親と、そして俺。

真っ赤な血で繋がった、他人の三人。

嫌いな奴と密室に閉じ込められたように、俺はそこいらじゅうのものを壁にぶちまけて飛び出したくなる。

生まれ育った家だというのに。

「京介はおなかが減らないんですか？」

チョコルが、ベッドにダイブして、ごろごろと転げまわる。

丁寧に整えていたシーツを好きなように皺だらけにして、チョコルはくだらないおしゃべりを始めた。

「なあ、チョコル。悪いが、静かにしてくれないか？ 空気を読め」

「読んでますよ。読んでるけど行動に移さないだけです。それにしても電気ぐらいつけたらどうなんですか？ なんだかエッチなムードですね」

「ばかか」

夜光塗料が塗られた時計の文字盤だけが光る部屋。

いつからか俺は自分の部屋の電気をつけなくなった。

家の外と中の境界が曖昧になって、呼吸が楽になるからだ。

「帰ってたのね。ごめんなさい、お食事にしましょう」

引き出しを漁るチョコルと取っ組み合いをしていたら、起きてきた母親がドアの向こうから言った。

階段を下りていくスリッパの足音を、かき消すように俺は窓を開ける。

「いかないんですかあ？ いい匂いがしてますよお」

チヨコルがまるで匂いが見えているかのように、鼻を動かす。

「無視しましたね？ ひどいですう」

俺はベッドに横になり、ヘッドホンの音量を最大にして、無理に目を閉じる。

たまらなく、大人になりたい。

こんなウサギ小屋よりひどい環境なんて。

いつそのこと、母親も壊してやろうか？

自分で家事の一切をするのは、面倒だ。

「いつでも壊せる」

「俺の真似か？ 似てないな」

チヨコルが耳元で俺の口調を真似して、ささやいた。

「いつでも壊せるなら、いまでいいんじゃないですかあ？」

「親を壊せと？ ひどいな、お前は」

「悪魔ですからあ。なんだか京介、この家に帰ってきてから、表情がちがいます」

そりゃ違つだろつ。

俺は獅子だ。

すべての上に、いる獅子だ。

「こんなところで寝るなよ、早く地獄にでも帰つたらどつだ」

チヨコルが俺の胸に、頭を乗せて眠ってしまったている。

「獅子より悪魔が上か」

俺はチヨコルを起こさないように、そっとベッドから出て窓を閉めた。

チヨコルが寝返りを打つ。その拍子に、チヨコルの胸のあたりから小さな手帳が出てきた。

「見るぞ、というか落ちたぞ」

チヨコルは夢の中だ。

俺は少しだけ後ろめたい気持ちだったが、手帳を開いた。

そして面食らった。

どこを開いても、チヨコレート、チヨコレートだ。

さまざまな種類のチョコレートの、感想が書いてある。

「こんなところは、真面目で熱心なんだな」

俺は手帳を閉じ、ベッドに放り投げた。

その時、一葉の写真が手帳から滑り落ちた。

拾い上げると、裏にルージュで書いたような文字で、書いてある文字を俺は読んだ。

「……あと七日」

「京介、勝手に人のかばん、あさりましね？ 最低ですっ！」

「落ちたから、直してやつただけだよ、人聞きの悪い」

朝っぱらから、これが。

「嘘です！ この写真は手帳の二十六ページにはさんであつたんです！ なんて二十七ページにはさんであるんですか！」

チヨコルの声が、頭に突き刺さる。やさしいメロディーの唄でも歌えば、聴き惚れてしまつかもしれないような声なのに、

どうしてこうも無駄に使うのか。

「数えなおしてみよ、チヨコル」

「いいでしょう！ 一ページ、二ページ」

「六ページ、七ページ」

「八ページ、って京介、わざとページ数を飛ばして邪魔しないでください！」

カーテンの隙間から差し込む光が、チヨコルの髪に天使のワツカを作っている。

「お前が寝ぼけて、そこに入れたんだろう」

本物の天使の頭に、天使のワツカが来ている、というのも変な表現だが。

「そんなはずはないです！ 最低つてのは、京介のことを言います！」

「なにもそんなに怒らなくてもいいだろう」

結局、学校に着くまでチョコロールのご機嫌は直ることはなかった。

鳩が俺の頭にフンをするまでは。

「あはははは！ 京介はツいてます！ あはははは！」

大きな目を見開いて、チョコロールは涙を流して笑っている。秋の天気のように変わりやすいコイツの機嫌を取るのは

至難の業だ。

「あッ、天に唾を吐くとどうなるか、教えてやります！」

頭に来た俺が、空中のチョコロールに向かって唾を吐くと、チョコロールは倍返して痰を垂らしてきた。

結局、セツトしたはずの俺の自慢の髪の毛に、鳩のフンとチョコロールの痰がついたまま、俺は校門をくぐることになった。

何も無い一日というのは、今日みたいなことを言う。

朝のホームルームでは、相変わらず担任がやる気のない出席を取る。

その名簿に載っている名前の何を知っているのか。

俺達は受験レースのただの出走馬だ。

「チョコル、ルコラに変わってくれないか」

配られたプリントで、紙ひこうきを折っていたチョコルは一瞥もくねずに、いやです、と答えた。

どうして何もかもが俺の思い通りにいかないのだろう。

「神様っているのか、チョコル」

「いつかは会えますよ、京介」

またこちらを見ずにチョコルは答えた。

神様。

力を手に入れてから訪れた無力感はなんなのだろう。

「それはいつだ」

「遠くない、未来です。そんなに遠くない」

紙ひこうきが、騒々しい教室の中を、音も無く飛んでいく。

俺は少なくとも、俺の世界の神様になりたい。

誰かにとっての、一脇役で死んでいきたくない。

繰り返していく日々の中で、俺はなにも見つけれずにいた。

家、学校。そして悪魔。

毎日、何かが変わっていつているはずなのに、まるで変わっていないように見える。

「最近はずっとお前といっしょだな」

これも原因のひとつだろうか。

「むふう、うれしいですかあ？」

「ああ」

そういえば、最近ルコラの姿を見ない。ルコラの甘ったるい雰囲気恋しくなった訳じゃない。

このうっとうしい悪魔といるのが苦痛になってきただけだ。

よく考えれば、俺にはプライバシーがない。

四六時中、頭上にはコイツがふわふわと飛んでいる。

何の用があるのか。

「お前は天上界、とでもいうのか？ 元いた場所に戻らなくていいのか」

俺はペダルを漕ぐ足を止めて、サドルから降りた。

こんな坂道、羽根が生えていたら一瞬でショートカット出来るのに。

上がりきった呼吸を整えるために、深く息を吸う。ハンドルに体重をかけて足を休める。

「前もいった通り、ルコラがたいていの雑務はやってってくれてますから。ルコラよりチョコルの方が、位は上なのですよ？」

そいつは意外だ。

「お前は、いったい何者なんだ」

「悪魔です」

遠まわしに一人にしてくれ、といったつもりだったのだが、通じなかった。

ご機嫌で鼻歌なんて歌いやがる悪魔を引き連れて、重い足を進めると引越し業者のトラックが追い越していった。

住宅街特有の静けさの中に、油の切れた自転車のブレーキ音が響

いた。

チヨコルは、ルコラより位が高い悪魔。

考えごとをしていたせいか。

俺は反応が遅れた。

大なり小なり怪我をする。反射的にそれだけは分かった。

立ち尽くしていた俺の前に、チヨコルが立っていた。

自転車に乗っていた男は妙な方向に折れ曲がった手首で、俺たちを指差した。

その男が虫に喰われた野郎だ、というのはすぐに分かった。

問題はそこじゃなかった。

チヨコルの目が、獣を殺める赤ん坊、とでも言えばいいのだろうか。

狂おしいほどに透き通っていた。

泡を飛ばして男が何かを叫ぶ。

その言葉を理解するまでもなく、俺は男の心を壊した。

「一応、礼をいうよ、チヨコル」

俺は倒れた自転車を起しながら、チヨコルに言った。

「それはこっちのセリフです」

チヨコルは何の嫌味がある風でもなく、そう答えた。

まあ。

せいぜい、とりついている人間に怪我でもさせてしまったら、悪魔様の沽券にかかわりでもするのだろう。

俺たちは長い長い坂をまた昇り始めた。

坂を上りきったということは、後は平坦な道がつづくだけ。

もしくは、下り坂が待っているということ、俺はまだ知らなかった。

明日香から電話があったのは、晩飯を終えて部屋で何をする訳でもなく、ベッドで目を閉じている時だった。

聞きなれた着信メロディ。

誰からの電話かは瞬間で分かった。

俺はいつものように聞こえないふりをして、まぶたの裏側の光模様を見ていた。

電話はいつものように、鳴らなくなった。

短いコールだ。

「京介、電話がなっていましたよお」

「知ってるよ」

チヨコルは別に関心がないようだ。

癖なのだろう、羽根をこすり合わせる音が、眠気を誘う。

欠伸をして、寝返りを打った時に、また携帯が鳴った。

聞き飽きたメロディ。

俺は念のためにディスプレイを見る。

明日香だ。

夜の住宅街を早足で歩いていると、ミニチュアの中に迷い込んだように思える。

時折通り過ぎていく、息を切らして追い越していくトレーニングウェア姿の女が、現実感を何とか繋いでいく。

「お願いだから、チョコル。少しの間だけ静かにしていてくれ」

「エッチいことでも考えているんですねえ？」

俺は返事をしなかった。

立ち入り禁止になっている公園には、誰もいない。

大きな常緑樹の脇の、フェンスの破れ目から、服をひっかけないように気をつけながら体をねじ込んだ。

砂場にしゃがみこんで、明日香は小さな山を作っていた。

猫が音も無く明日香の後ろを通りすぎていく。

風が吹いて、明日香のショートカットを少しだけ揺らした。

俺はわざとらしくくしゃみをした。

「偶然だな、明日香。こんなところで会うなんて」

「ほんと偶然」

明日香は手を払うと、座れとでも言うようにデニムのパンツの隣を指さした。

「毎回毎回、私が二度コールすると、公園に京介があらわてくれるなんてね」

明日香は黙って砂を手ですくい、山の頂上に落としていく。

青白い人工的な蛍光灯の光で、顔色が分からない。

今日は、話し始めるまで何分かかるだろう。

もしかしたら一時間も二時間もかかるかもしれない。

「引越すことになると思う」

最長記録は二時間だ。

我ながら気の長いものだと思う。

「そっか」

「そっ」

俺は向こうに見える大時計で時間を確認した。

明日香が砂遊びに飽きるまでの時間、四十五分。

話した時間、二分。

俺はとても損した気分で、公園に残っていた。

「なあ、チヨコル。お前の親はどんな奴だ？」

「……」

静かにしていてくれ、と言ったことを思い出した。

こづいところろは律儀というのか。小ばかにしているのか。

「もう喋っていいぞ」

「チヨコルは静かにしているの苦手です」

「だろうな」

空気を読まないチヨコルのテンションが有難いのかもしれない。

今、このまま一人でいたら、俺はこのまま夜を明かしてしまいうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0126q/>

悪虫 wa-mushi

2011年10月6日13時03分発行